

建築家・谷口吉郎の言説における建築思想に関する
研究「模倣」・「記念」・「触媒」をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富久, 亜以, Tomihisa, Ai メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029370

博士論文内容の要旨

専攻名.....総合創成工学専攻.....

分野名.....建築都市システム分野.....

氏名.....富久 亜以.....

1 論文題目（英文の場合は、和訳を付記すること）

谷口吉郎の記述における建築思想に関する研究
「模倣」・「記念」・「触媒」について

2 要 旨（和文 2,000 字程度又は英文 800 語程度にまとめること。）

建築家である谷口吉郎は、多くの建築作品を残しているが、どのようにして考えて建築を造ったのかが不明であり、建築制作への思想的な問題が不明確なまま残されている。本研究では、こういった背景より未だ不十分であるともいえる谷口吉郎の思想的な事柄へ着目し積極的な再評価を試みる。本論文は、谷口吉郎の記述において重要な位置付けにある鍵語に注目して、その意味を解釈することを通して、彼の建築思想を明らかにすることが本研究の目的である。

本研究の主題は、「谷口吉郎の記述における建築思想に関する研究「模倣」・「記念」・「触媒」について」であり、5章から構成される。研究の進め方としては、収集した資料から鍵語を抽出して、その前後の言説の内容の整理・検討して、鍵語に関わる意味の解釈を行う。

第1章では、研究の背景と目的、既往研究のレビュー、進め方と研究資料、論文の構成として、研究全体の見通しを俯瞰している。

第2章では、「模倣」に関する語を鍵語として着目し、谷口の捉える「模倣」の意味を明らかにした。谷口は、ドイツ出張以前から「模倣」という事柄に着目しているが、20世紀合理主義の立場から「模倣」を捉えると、それを否定的な事柄として捉えていた。しかし、1938年～1939年ドイツ出張時においてシンケル建築に出会ったことで、「模倣」の意味を肯定的に捉えるように変化していることが分かった。シンケルの時代において「模倣」することは、制作する方法に関わっており、正しい事柄とされ、制作する主体に関する精神性、態度的事柄として捉えられた。また古典を「模倣」したシンケルの建築を通して、「模倣」の特性には、制作者の態度的側面だけでなく、「新しい様式の革新性」と「古い伝統の継承性」の二重の意味をもつことが引き出された。

専攻名	総合創成 工学専攻	分野名	建築都市 システム分野	氏 名	富久 亜以
<p>さらに、シンケルの建築が、様式の「模倣」への関心として、「記念」に関わる事柄に展開され、その「記念」の特性へと以後、展開されることになる。また、ドイツ出張以後の「模倣」は、否定的な意味と肯定的な意味の、二様の意味が引き出された。さらに、出張時のドイツ経験におけるシンケルーヴィンケルマン的な垂直的な意味とは異なる、ドイツ出張以前から保持していた生活的で水平的美（日常の美）への展開の可能性と、谷口の肯定される「模倣」の新たな方向性を引き出すことができた。</p> <p>第3章では、「記念」に関する語を鍵語として着目し、谷口の捉える「記念」の意味を明らかにした。シンケルの建築表現の「記念碑的」な事柄は、「模倣」する古典主義建築と関わって、建築物として外在的に表現されていた。ここでの「記念」の特性は、①追憶、追慕することから、「思い出」の造形であること。②「模倣」の特性と同様、「革新性」と「古典主義の伝統性」を持ち、制作することや設計の意図となるような事柄であること。③「画心」や「詩魂」など人の思いを「記念する」こととして引き出された。このことから、シンケルの「模倣」と「記念」することの、深い関わりがあることが明示化される。</p> <p>第4章では、「触媒」に関する語を鍵語として着目し、谷口の捉える「触媒」の意味を明らかにした。「触媒」に関わるその特性を総括してみると、庭の造形に関わる「思惟作用」、「墓碑」に関わる（霊的作用）、「詩」と「美」に関わる（イマジネーションの作用）、「祈禱の造形」に関わる（歴史的遡行作用）、「記念碑」に関わる（精神的作用）、「死の床」に関わる（追憶の作用）として示された。</p> <p>第5章では、本論全体のまとめとしている。谷口吉郎の捉える3つのキーワードである「模倣」・「記念」・「触媒」は、谷口吉郎の建築思想・建築表現として関係性のある事柄として捉えられた。重要なことは、古典主義建築の「模倣」が、その時、その時代の表現となることから、「時代性」のある古典主義を「模倣」することは、必然的な建築の造形的表現であることが引き出された。</p> <p>以上のように、谷口にとっての古典の「模倣」は、「いきいきとした新時代の曙光であった」として捉えられ、それは、「時代の要求する新しい発展」の表現となることであり、建築設計思想としての深い革新性として展開していく過程を読み取ることができた。本研究では、こうした谷口のシンケルの様式の「模倣」への関心が、ある種の「記念」に関わる事柄に展開され、さらに「触媒」へと拡張する意味の広がりを持った特性を帯びることを明示した。そしてこのことは、帰国後の谷口にとって、多くの記念的な造形を作成しており、格別な意味を持っていたことが推察される。谷口吉郎の記述における建築思想に関して、特に「模倣」・「記念」・「触媒」について着目することで、彼の建築設計への建築思想の根本理念としての関係性が明らかになった。</p>					